

ALA の図書館情報学教育認定基準 2008年版に関する考察 —1992年版の改定と課題を中心に—

中島幸子 大城善盛 漢那憲治 山本貴子

A Study of Standards for Accreditation of Master's Programs in Library & Information Studies, 2008

—the updating process from 1992 and current problems—

1. はじめに

アメリカ合衆国（以下、アメリカ）における専門職養成のための図書館情報学教育を理解しようとする際、「認定制度」(accreditation)と「認定基準」(accreditation standards)を理解することが重要となる。アメリカの高等教育界には、厳密な意味では日本の文部科学省のように中央で教育を統括する政府機関は不在である。そのため、教育の質をコントロールするためにアメリカ独自の認定制度が生まれ、民間の複数の認定団体 (accrediting associations) がその役割を担っている。

認定団体は大別して、①大学を教育機関として全般的に評価する団体（地域団体）と、②大学の各部門の専門性を評価する団体（専門職団体）の2種がある。そして、それらの認定団体を評価認証する高等教育認定委員会 (Council on Higher Education Accreditation、以下 CHEA) という組織もある。

認定においては、認定団体による認定基準の作成・維持が必要となる。特に専門主題領域を中心とする認定団体（専門職団体）の場合、異なった意見を持つグループや個人が存在することが多く、それらの異なる意見を集約・勘案して認定基準に反映させねばならず、認定基準の作成時は議論が沸騰す

るのが常である。それに加えて、認定プロセスは、認定する側（認定団体）と認定される側（大学）に多大な費用と時間と労力を要する。現在、一部の専門主題領域が認定に否定的な動きをしているものの、このような認定制度は2010年現在でも有効に機能しており、アメリカでは高等教育の質的コントロールのために必須の制度と見なされている⁽¹⁾。

図書館情報学教育を認定する団体はアメリカ図書館協会（American Library Association、以下ALA）である。すなわち、ALAは図書館情報学教育のプログラムを認定する専門職団体である。ALAは直轄の委員会である認定委員会（Committee on Accreditation、以下COA）を設置し、認定基準の作成・維持から、認定プロセス（作業）までを一任している。なお、COAは、前述のCHEAによって、図書館情報学教育のプログラムを認定する組織として認可されている。本稿で取り上げる認定基準はCOAが作成する‘Standards for Accreditation of Master’s Programs in Library & Information Studies’である。

図書館情報学教育の認定に関する先行研究としては、大城と溝上がある⁽²⁾。しかし、2つともStandards for Accreditation of Master’s Programs in Library & Information Studies 1992’（以下、1992年版という）までの研究であり、認定の歴史や役割をまとめている。本稿では公表されたStandards for Accreditation of Master’s Programs in Library & Information Studies 2008’（以下、2008年版という）の概要を中心に、2008年版ができるまでの経緯、認定基準の持つ課題とその対応策に関する論議を整理し、図書館情報学教育の認定についてこれからの方向性を示唆していきたい。また、認定基準の改定と同時に検討された「図書館員の核となる能力」、すなわち認定プログラムを卒業した学生が持つべき「核となる能力」とは何なのか、について、これまでの議論を踏まえて、2009年にALAで承認された「ALAの図書館専門職の核となる能力（ALA’s Core Competencies）」の内容を考察し、図書館情報学教育がめざす基本的な能力についても言及する。

2. 2008年版認定基準の策定

2. 1 1992年版改定の動き

COA は、1992年版が作成された後、定期的に認定基準のレビューを行ってきた。2002年には臨時に設置された基準レビュー委員会 (Ad Hoc Standards Review Committee) によって、過去10年間に起こった図書館情報学カリキュラム及び雇用者の期待の変化を指摘した報告がなされた⁽³⁾。そして、COA は2003年から2007年まで5年をかけて再度1992年版を見直し、改定案を作成し、ALA 会議等の公聴会で提示して多くの関係者の意見を徴収し、2008年に新しい認定基準を作成した。これが現行の2008年版である。

COA による2008年版の改定作業に際しては以下に述べるような提言や推薦事項がさまざまな組織や会議からなされた。

2. 1. 1 ALA 主催の専門職教育会議 (1999-2003年)

1990年代後半、専門職図書館員 (professional librarian) の養成に関して、図書館現場や大学の養成場 (図書館情報学部、学科、課程等) からいろいろな疑問が投げかけられた。図書館専門職教育の認定に対して責任のある ALA は、それを黙認することができず、ALA 理事会は1999年に専門職教育会議 (Congress for Professional Education) を開催することを決めた。専門職教育会議は4分科会に分かれて開催され、そのうち2つの分科会では「図書館情報学教育の課題」と「専門職の課題」と題して、次のようなテーマが議論された⁽⁴⁾。

- ・「図書館情報学教育の課題」分科会：

①専門職図書館員の中核的能力と価値観、②(図書館専門職という範疇での) 一般的実務者 (generalist librarian) とスペシャリストの養成法、③カリキュラム、④認定機関 (ALA、NCATE など)、⑤図書館情報学教育へのアクセス、⑥理論と実践、⑦経験学習。

- ・「専門職の課題」分科会：

①図書館専門職の価値、②図書館専門職の知識とスキル、③妥当な学位、④図書館専門職は1つの専門職か、専門職グループの名称かの課

題、⑤図書館専門職の伝統的な役割と新しい役割、⑥継続教育、⑦専門職図書館員の他のキャリアの可能性、⑧資格証、⑨管理運営者の訓練、⑩第2修士号の専門化、⑪就職、⑫多様性、⑬経済的問題（大学と雇用者にとっての費用対効果など）。

専門職教育会議には、アメリカ学校図書館員協会（Association of American School Librarians、以下 AASL）、大学研究図書館協会（Association of College and Research Libraries、以下 ACRL）、図書館情報学教育協会（Association of Library and Information Science Education、以下 ALISE）等の ALA の内部部会と、専門図書館協会（Special Libraries Association、以下 SLA）、アメリカ法律図書館協会（American Association of Law Libraries、以下 AALL）、医学図書館協会（Medical Library Association、以下 MLA）、研究図書館協会（Association of Research Libraries、以下 ARL）、カナダ図書館協会（Canadian Library Association、以下 CLA）等の関連ある外部団体から、の150人の代表が招聘された⁽⁵⁾。

専門職教育会議の後、ALA によって次の事項が推薦された⁽⁶⁾。

（1）「図書館専門職（library profession）の範囲、内容、価値の定義」領域

1. 図書館専門職の「核となる価値（信条）（core values）」、「核となる能力（core competencies）」を明確にし、同定する
2. 将来の一般的実務者としての図書館員（generalist librarian）の能力を同定する
3. 多様性を積極的に推進すること。

（2）「認定基準の作成・適用」領域

1. ALA から独立した認定機関の可能性を探る
2. ALA は図書館員養成のみを認定するのか、他の情報専門職の養成も認定するのか、を明確にする
3. 最善の実践法を見つけるべく、他の専門職の認定プロセスを検討すること。また、ALA 認定基準の定期的なレビューのプロセスを明確にし、強化する

4. 学校図書館員養成のための ALA/NCATE プロセスを明確にし、主流（ALA 認定局の役割）に組み入れる
5. ALA の認定プロセスについての理解を深めること。特に、それは成果を対象にしており、図書館専門職にとって極めて重要であることを明らかにする
6. 認定プロセスに実務者が参加するメカニズムを強化する
7. 外部レビュー・パネル（External Review Panel）⁽⁷⁾ の訓練を強化して、認定プロセスの強化に努める
8. 認定対象の図書館情報学部のプログラムが認定基準を満たし、核となる能力（core competencies）が存在するようにすること。

上記の推薦事項に対して、ALA 評議員会は、①「核となる価値」（core value）作業委員会、②「核となる能力」（core competencies）作業委員会、③「外部認定団体」特別作業委員会等を設置してそれぞれを検討させた。

2. 1. 2 「外部認定団体」特別作業委員会

「外部認定団体」特別作業委員会（以下、特別作業委員会）は ALISE、SLA、AALL、MLA、ARL 等からの代表も加えて構成され、認定制度について2年間にわたる検討作業を行った。

その結果、作業委員会は、当時の認定制度を、ALA の中に設置された歴史価値を持つ制度であり、提供される認定修士号は広く認知され尊敬されていて、雇用上、必須条件にしている図書館も多いと評価した。さらに認定基準は学問的な視点を維持しながら、多様性を認めるシステムになっており、認定プロセスは、図書館情報学部に自分たちの目標、カリキュラム、成果を検討する機会を与えていると指摘した。しかし、同時に認定制度の欠点（限界）として、ALA の閉鎖性からくる図書館の外的変化に対する鈍感さ、他の情報専門職協会の認定への関与なし、認定の影響力の弱体化、COA の自律性の欠如、といったことを指摘した。この指摘を踏まえて2001年に次のような提言を行った⁽⁸⁾。

- 1) 認定機関を、ALA、SLA、AALL、MLA、ARL、CLA、ASIST、SAA 等の連合体にすること。そして、ALISE は戦略的パートナーと

して加わること。

2) アーキビストや記録管理者も含む様々な情報専門職養成プログラムを認定対象にすること。また、情報科学、情報管理、図書館学という名称の学部レベルのプログラムも認定対象にすること。

特別作業委員会はこの提言が実施されれば、図書館情報学の領域が拡大することができること示唆した。つまり図書館情報学領域のすべての団体が正式に認定プロセスに参加することにより、新しい人的、財政的資源を認定プロセスにもたらし、この領域を集团的に拡大・増強でき、そのことによって図書館情報学領域の知識、能力、価値における役割をさらに強く主張することができるとした。ただ、この提言は ALA 理事会には受け入れられず、特別作業委員会はこの後解散となった⁽⁹⁾。

2. 1. 3 「ALA2010年に向けて」(2005年)と COA 戦略的計画2005-2010 (2006年)

ALA は2005年に「ALA2010年に向けて」(ALAhead2010)の名称で戦略を作成した⁽¹⁰⁾。その中で、教育について「ALA は、専門職図書館員とスタッフのために質の高い大学院教育と継続教育の機会を確保するためにリーダーシップを発揮することを目標とし、認定基準が図書館専門職のニーズと核となる価値観を確実に反映させること」としている。政策と基準については「ALA は、図書館情報サービスに影響を及ぼす全米的、国際的政策や基準の作成において、重要な役割を果たす」としている。

COA はこの「ALA2010年に向けて」戦略に呼応して、2006年に「戦略的計画、2005-2010」(Strategic Plan 2005-2010)を作成し⁽¹¹⁾、次のような目的と行動目標をあげている。

目的1：認定基準が図書館専門職のニーズと核となる価値観を確実に反映させる

目的2：ALA が包括的、かつ効果的に運営・管理され、財政的にも健全な組織であるようにする

行動目標

1. 5年サイクルで認定基準をレビューする

2. COA の取り組みを年次大会や報告書を通じて ALA 評議会に伝達する
3. 多様性等も含めた図書館専門職のニーズ領域や、さらに基準の遠隔教育の部分を考慮して、基準を明確にし、維持していく
4. 外部レビュー・パネルの報告書に対してアドバイスを与える計画を立てる

2. 1. 4 「教育フォーラム：図書館員のための教育」（2006年）

認定については、上記以外にも2004-2006年間の ALA 年次大会や冬期会議等でも大きな話題になっていた。たとえば、認定されている図書館情報学部の教育と21世紀の図書館で必要とされている知識、スキル、及び能力の間に存在するギャップ、「核となる一連の能力セット」(a set of core competencies) の欠如、認定図書館情報学部の卒業生の能力、知識、スキルの欠如、情報学志向の教授陣の現状から、非常勤任せの図書館学、図書館学関連の調査研究の不十分さなどといった状況が指摘されていた⁽¹²⁾。

このような状況認識のもと、2005年に ALA 会長に就任したゴーマン (M. Gorman) は、2006年に「教育フォーラム：図書館職のための教育」(Forum on Education: Education for Librarianship) を個人的な主催で開催した。6月には2回目のフォーラムが開催されたが、それもゴーマンの個人的な主催であった。しかし、3回目以降のフォーラムは、ALA、COA、ALISE 等の共催になっていて、2010年現在でもつづいて開催されている⁽¹³⁾。

特に当時の ALISE の会長バッド (J. Budd) とゴーマンの発表は注目された。バッドは、図書館学教育 (education for librarianship) は図書館専門職の特徴と統合されるべきであり、コアカリキュラムはその統合を反映すると発表して、コアカリキュラムの必要性を訴えた⁽¹⁴⁾。

また、ゴーマンは1992年認定基準と図書館情報学教育の状況を次のように激しく批判した⁽¹⁵⁾。

1. 現場の図書館は、認定基準が言及する「記録可能な情報と知識」(recordable information and knowledge) に関心はなく、「記録された情報と知識」(recorded information and knowledge) への

み関心を持っている。

2. 認定基準は、図書館専門職が関わるテーマよりも広い内容を扱っている。

3. 認定基準は、(図書館情報学部の)教育目的の中に「記録媒体の管理と利用を促進するサービスと技術」(services and technologies to facilitate their management and use)を反映するよう要求しているが、それは2005年の「核となる能力声明」(草稿)のように、専門職図書館員の「核となる技術的知識」として位置付けるべきである。

以上、2008年認定基準の改定までの動きを概観した。まとめてみると、認定組織の拡大、認定プログラムの対象の拡大などを図り、より図書館情報学教育の領域拡大を狙う提言と、カリキュラムの規定、認定されたプログラムが目指す図書館情報専門職が持つべき能力を明確にすることが必要として、図書館情報学教育の存在意義を強調するべきという批判があるようだ。

2. 2 2008年版認定基準の概要

2. 1で述べた提言や戦略は2008年認定基準に大きく反映されることはなかった。2008年基準は、多くの部分で1992年認定基準を踏襲しているといえる。ここで1992年版基準と比較しながら2008年認定基準を概観する。

2008年認定基準は、「序文」の中で、次のように記している⁽¹⁶⁾。“library and information studies”とう用語は、「記録可能な情報と知識」(recordable information and knowledge)と「記録媒体の管理と利用を促進するサービスと技術」(services and technologies to facilitate their management and use)に関わる学問を意味している。それは、情報と知識の創造、伝達、同定、選択、収集、組織化と記述、保管と検索、保存、分析、解釈、評価、統合、提供、管理、を含んでいる。そもそも認定基準は、修士号につながる大学院の図書館情報学教育(graduate program of library and information studies)の測定・評価に限定している。

ALAは、COAを通じて、公共の利益を保護し、教育者への指針を準備している。それは図書館情報学に関心を持つ学生、専門職員を雇用する雇業者、及び図書館情報サービスの質に関心を持つ一般の人々は、特定の教育プ

プログラムが良質のものであるかどうか、を知る権利を持っているからである。COA は、認定基準を満たした教育プログラムを量的ではなく、質的に同定することによって、図書館情報サービスに従事する専門職員養成の質的コントロールの手段を提供している⁽¹⁷⁾。

認定基準はまた、教育効果を評価するための規準開発 (development of criteria) によって卓越性を確保しようという意図があって、規範的 (prescriptive) な記述でなく、指示的 (indicative) な記述にしている。基準全体を通して、評価には、教育プロセスや資源だけでなく、学生の学習成果として目的達成のための教育プロセスや資源の効果的な利用も含まれている。その上、修士号につながる大学院の図書館情報学教育の認定を受けようとする機関 (大学) は、その評価結果をひろい意味での継続的なプログラム計画、測定・評価、開発、及び改善に利用する義務を負っている⁽¹⁸⁾。

2008年基準の特徴は、ゴシックで書いた「学生の学習成果として表れる」と「測定・評価」のことばである。認定の視点を、「認定プログラムは単に教育目標を持っていること」という抽象的な表現ではなく、具体的に「学生の学習成果に反映する目標を持つ」と言っている。学生の学習成果を明確に示すことが目標の一つであると考えているのである。

また、プログラムの目標、カリキュラムの内容 教員採用、学生募集において、1992年版では、「多言語 (multilingual)、多文化 (multicultural)、多様な倫理観 (multiethnic) という社会の特質を常に考慮する」としているが、2008年版では、「社会の多様性 (diversity)」ということばを使っている。ALA は、政策方針の中で、「多様な社会のニーズに応える図書館教育」とは、大学院の図書館情報学部 (プログラム) が、学生、教員、及びカリキュラムに関連する全ての人々の多様な歴史や情報ニーズを確実に反映することを奨励している。認定基準はこの政策方針の精神の中で理解されることが大事である。

2008年認定基準の「後記」によると、改定の背景には、①図書館界でその期間に図書館情報学教育に関する関心が高まったこと、②基準レビュー委員会の2002年報告の中に外部レビュー・パネルの人たちの意見を反映させるべきだという記述があったこと、③認定基準に対する認定対象 (図書館情報学

部)の混乱(誤解)が生じているという認識をCOAメンバーが持ったこと、の3つの要因があった⁽¹⁹⁾。

また、両基準とも改定時にあがった重要な課題として、次のようなテーマを挙げている⁽²⁰⁾。

・両方の基準に見られる重要課題：

多様性、(図書館情報学)領域の定義、他の研究領域や他のキャンパスとの相互交流、遠隔教育、複数の学位プログラム、管理、グローバルゼーション、倫理

・1992年認定基準の重要課題：

アクション志向、差別、卓越性、未来への焦点、刷新、継続的な評価プロセス、哲学、原則、研究調査、専門化(specialization)、技術、利用者

・2008年認定基準の重要課題：

体系的な計画作成、学生の学習成果、価値

1992年から引き続いて、領域の定義や学位、相互交流といった課題が挙げられているのは、図書館情報学についてのアイデンティティの危機といえなくもないが、それだけ学際的になってきたといえるだろう。

3. 「核となる能力」についての論議

3. 1 「核となる能力」作業委員会の報告

すでに述べたように、認定基準は修士課程プログラムを対象としており、プログラムを卒業して図書館情報専門職になるためにはどのような能力を持つべきかまでは具体的に明確にしていない。このことについては2. 1で触れたようにさまざまな批判があった。ALAは推薦事項の中の「図書館専門職の核となる能力を同定すること」に基づいて、「核となる能力」作業委員会を1999年に設置し、その根拠として次のようなことを挙げた⁽²¹⁾。

教育者、実務者、市民に図書館専門職に必要な能力(competencies)を明確に提示すべきである。このことについて1992年版に一応記述はあり、認定プロセスにおける重要性についての記述もある。しかし、それ

を再確認し、再考し、改訂する必要がある。そして、その改定されたものは認定基準とは別の形で入手可能とすべきである。

専門図書館組織（例：SLA や AALL）や ALA の部会（例：児童への図書館サービス部会）は、それぞれの分野での必須の専門的能力を規定している⁽²²⁾。それらの能力規定は、教育者が教育計画を立てる際に、実務者が継続教育を計画する際に有用である。しかし、一般の専門職図書館員 (generalist librarian) に適用可能な基本的な能力はなく、それが必要である。

こうして、2005年に作業委員会が「核となる能力」について草稿を作成した。草稿では、次の8つの基礎能力を求めている⁽²³⁾。

- 1) 専門職としての倫理
- 2) 資料構築に関する知識
- 3) 知識の組織化に関する理解
- 4) 技術的知識の理解と実践
- 5) 情報サービスを通じての知識の提供
- 6) 教育と生涯学習についての知識の蓄積
- 7) 調査研究を通しての知識の探究
- 8) 図書館経営能力

これに対して COA は次のように応えた⁽²⁴⁾。

ALA の認定を受けている53の図書館情報学部（学科や課程も含む。以下同じ）はこの草稿に沿ったカリキュラムを編成していて、「核となる能力」をカバーするような科目を開講している。ただ、ALA の認定基準は、図書館情報学部の教育は、親組織である大学の価値観、学部の文化や使命、教育プログラムの目標、目的と一致するような方法で達成されるとしている。また、図書館情報学領域の哲学、原則及び倫理もそこに反映することを求めている。さらに、図書館情報学部のカリキュラムは卒業生の生産的なキャリアを積むために必要な能力を確実に開発することを求めている。

COA は、図書館専門職や他の情報専門職に要求される知識、スキル、経験を含んだ能力 (competencies) の重要性を認識し、その草稿の包括的なアプローチに対しては高く評価している。しかし、草稿にある能力

(competencies) が個人のある特定の行動を実践するための力量 (capacity) を反映するものであるならば (‘competencies’ は通常そのように理解されている)、履修によって習得される科目の知識がいかにか効果的に利用されるかを示せるように、草稿の文章を書き改める必要があるという⁽²⁵⁾。

その後、「核となる能力」の作成作業は、作業委員会から2006年に設置された ALA 会長図書館学教育作業委員会 (Presidential Task Force on Library Education、以下 PTFLE) へと引き継がれた。PTFLE は、草稿をもとに修正案「ALA の図書館職の核となる能力」(ALA’s Core Competences of Librarianship) を2008年に作成して、2009年に正式な ALA の図書館専門職養成のための教育方針となった⁽²⁶⁾。次にその内容を概観する。

3. 2 「ALA の図書館専門職の核となる能力」

(ALA’s Core Competences of Librarianship)

2009年に公表された「ALA の図書館専門職の核となる能力」(ALA’s core competences of Librarianship) の内容は以下の通りである⁽²⁷⁾。これは、図書館情報学教育、特に認定プログラムのカリキュラムと合致することにより、図書館専門職教育と実際の図書館実務が結びつき、より実際的な教育内容を発展させるものと期待されている⁽²⁸⁾。ゴーマンが強く主張した図書館職に求められる能力と後述する PTFLE の推薦事項にも挙げられているので詳細に紹介する。

1) 専門職の基礎

- 1 A. 図書館情報専門職の倫理、価値、基礎的な原則を知っている
- 1 B. 民主主義の原則と知的自由 (表現、思考、良心の自由を含む) の推進における図書館情報専門職の役割を理解している
- 1 C. 図書館と図書館員の歴史を知っている
- 1 D. 人類のコミュニケーションの歴史と図書館における影響を理解している
- 1 E. 館種 (学校図書館、公共図書館、学術図書館、専門図書館など) や関連情報機関の現形態を知っている

- 1 F. 国内外の社会、公共、情報、経済、文化の各政策と図書館情報学の専門性に対する顕著な動向を知っている
 - 1 G. 図書館や情報機関内で使われる法的枠組みを理解している（それらには著作権やプライバシー、表現の自由や権利の平等に関連する法律を含む）
 - 1 H. 図書館、図書館員や他の図書館職員、図書館サービスのための効果的なアドボカシーの重要性を認識している
 - 1 I. 複雑な問題とその適切な解決に使われる手法を利用できる
 - 1 J. 効果的なコミュニケーション技術（会話や文章）を使うことができる
 - 1 K. 専門性の中の特定の領域に対する認証またライセンスの必要性を理解している
- 2) 情報リソース
- 2 A. 情報のさまざまな段階での利用を通しての創造から廃棄まで、記録された知識と情報についての考え方と課題を知っている
 - 2 B. 評価、選択、購入、整理、保存、除籍、を含む、情報源の受入と廃棄についての考え方、課題、方法を理解している
 - 2 C. 多様な蔵書管理についての考え方、課題、方法を理解している
 - 2 D. 保管と保存を含む蔵書管理についての考え方、課題、方法を理解している
- 3) 記録された知識・情報の組織化
- 3 A. 記録された知識・情報の組織化と表現に関する原則を応用できる
 - 3 B. 記録された知識・情報源を開発する、記述する、評価するための必要なスキルを持っている
 - 3 C. 記録された知識・情報を組織化するために利用する目録、メタデータ、索引作成、分類の構造を理解している
- 4) テクノロジーに関する知識と技術
- 4 A. 図書館や他の情報機関においての情報源、サービスの伝達、利用に影響を与える情報技術、コミュニケーション技術、支援スキルを理解している

- 4 B. 専門職倫理や普及しているサービス基準とその適用と合致する情報、コミュニケーション、支援ツールや技法を理解し、応用できる
- 4 C. 技術にもとづく製品やサービスの仕様、効力、経済的効果を測定、評価する方法を理解している
- 4 D. 適切な技術的進展を認識し、実践するために新しく出現する技術を見つけ、分析するために必要な基本技法を理解し、応用できる
- 5) レファレンスと利用者サービス
 - 5 A. すべての年齢層、グループのそれぞれの人に記録された知識・情報への適切で正確なアクセスを提供するレファレンスや利用者サービスの概念、原則、技術を理解している
 - 5 B. すべての年齢層、グループのそれぞれの人のために多様な情報源から情報を検索し、評価し、統合する技能を持っている
 - 5 C. 記録された知識・情報の利用の際にすべての年齢層、グループのそれぞれの人に相談、仲介、支援を適切に提供する方法を知っている
 - 5 D. 情報リテラシー／情報技術と方法、計算リテラシーと統計リテラシーを身につけている
 - 5 E. サービスの概念やサービス自体を推進し、説明するアドボカシーの原則と方法を理解している
 - 5 F. 多様な利用者ニーズや、利用者コミュニティ、利用者の選好に対応し評価する原則を知っている
 - 5 G. 適切なサービスや情報源の構築の計画、実践における現在の状況を評価するための方法や原則を知っている
- 6) 研究
 - 6 A. 量的、質的調査方法の基礎を理解している
 - 6 B. 主要な研究結果とその関連文献を解釈できる
 - 6 C. 新しい研究の現実的な価値や可能性を推し量るための原則や方法を知っている
- 7) 継続教育と生涯教育
 - 7 A. 図書館や他の情報機関における現場の職員の継続的な専門性向上

の必要性を知っている

7 B. 図書館サービスの推進における質的サービスの提供と生涯学習の利用において生涯学習を理解することを含めて、利用者の生涯学習における図書館の役割を理解している

7 C. 学習理論、教授法、成果の測定法を理解し、それらを図書館や他の情報機関に応用できる

7 D. 記録された知識・情報の探索、評価、利用に関連する思想を理解し、プロセス、スキルを評価し応用できる

8) 運営と管理

8 A. 図書館や他の情報機関における計画と予算作成の原則を知っている

8 B. 効果的な人事の実践や人的資源構築の原則を理解している

8 C. 図書館サービスやその成果の測定、評価のための方法とそれを支える思想を理解している

8 D. 対象のコミュニティにおいて、すべての利害関係者において、彼らとのパートナーシップ、協働、ネットワークの構築のための方法とそれを支える思想を知っている

8 E. 主要な、変革的リーダーシップのための方法と関連する課題とそれを支える思想を理解している

2008年版に見られるカリキュラムについての基準はこの「核となる能力」の内容に比べれば、もっと学際的なものである。

4. 2008年版の課題

4. 1 ALA 会長図書館教育作業委員会 (PTFLE) の最終報告

PTFLE は2006年に当時の ALA 会長バーガー (L. Burger) によって設置され、その任務は認定された図書館情報学部のコアカリキュラムを明確にする全米基準を作成し、その中に必要な核となる知識体系を記述し、図書館専門職の核となる能力や価値観、倫理観を強調すること、また、認定基準の変更に必要な部分を指摘することなどであった⁽²⁹⁾。

PTFLE が2009年冬期の ALA 理事会に提出した最終報告には、2008年版基準に対する推薦事項と、「ALA の図書館職の核となる能力」(2008年案、3.2で示した内容)と ALA の2008年認定基準の修正案が含まれていた。この最終報告に対して、COA は2009年6月付で回答している⁽³⁰⁾。

COA は、回答文書の冒頭で次の3点を強調した⁽³¹⁾。

- ① COA は親組織である ALA の影響を受けずに独自の立場で変更に取り組まねばならない
- ② 変更に関しては、時代の変化に対する「応答性」と現状との「一貫性」のバランスを保つ必要がある
- ③ 認定基準を変更するためには、相当量の相談、熟慮及び時間を要するこのことについては ALA と COA が CHEA (認定団体を認定する組織)に認証されていることが重要な根拠となっている。大学は CHEA に認証されていない認定団体から認定されることに消極的である。CHEA に認証されるための要件の中に、次の2つが含まれている⁽³²⁾。

- ① 認定団体は、認定活動を行う際に、そして認定対象の認定の可否を決定する際に、親組織から独立していること (COA の場合、ALA の影響を受けていないこと。)
- ② 認定団体は、応答性、柔軟性、説明責任を高めるために継続的な自己点検を行っていることを明確にし、認定対象への効率的、かつ効果的なサービスを提供する試み、認定対象機関全体と高等教育界への認定価値のレビュー、認定対象機関に対する認定基準や認定手続きの影響のレビューなどを継続的にやっていることを明らかにすること。

PTFLE の最終報告に提示された2008年版に関する推薦事項とそれに対する COA の回答を対比させたものが表1である。PTFLE は認定基準にもっと強制力を与え、修士課程で図書館専門職を育成することをカリキュラムの中に明確にすることを強調している。

これに対して、COA は全体として PTFLE の最終報告の推薦事項はすぐには受け入れられないとして、以下のように理由を説明している⁽³³⁾。

認定基準の変更は認定プロセスの一部であり、(専門職の基盤である)学問領域の進化や現場のニーズの変化を反映しながら行われることは当然であ

る（応答性の必要性）。しかし、（図書館情報学部の）教育プログラムは、長期にわたって効果的に計画・実施するために、認定基準とある程度の一貫性を保たせる必要がある。この応答性と一貫性のバランスを保つことは認定機関にとって挑戦的であり、認定基準を変更するためには、相当量の相談、熟慮及び時間を要する。また大学にとっても、変更された基準に自分たちの計画を合わせるためには相当の時間が必要となる。特にカリキュラムに含む際には、地域認定団体による認定とも関係する場合が多いので、大学が計画、実施及び評価するのに1年もしくはそれ以上の時間が必要になる。

こうした理由から、COAの基準変更が複数年サイクルで行われているのである。早急な変更を望む人々にはフラストレーションを起こさせるであろう。しかし、早急に変更すると、異なる教育プログラムに複数の認定基準を適用しなければならない状況が起こる可能性があり、それはCOAの能力を超える。認定基準は、COAが各教育プログラムの特殊でユニークな側面を統一した方法でみるレンズの役目を負っている。COAは、すべての関係者に奉仕すべくコミットしており、また関係者の利害関係のバランスを取ることによって、専門職教育の活力ある、そして実りのある礎になるよう努めている⁽³⁴⁾。

表1 PTFLEの2008年版に対する推薦事項とCOAの回答

PTFLEの推薦事項	COAの回答
<p>1. ALAは、「ALAの図書館職の核となる価値」(ALA's Core Values of Librarianship)と「ALAの図書館職の核となる能力」(ALA's Core Competences of Librarianship) (2008年案)を認定基準の中に取り込むこと。</p>	<p>1. に対して 「ALAの図書館職の核となる価値」と「ALAの図書館職の核となる能力」とは、効果的な専門職的図書館情報サービスとはどんなものか、という現在継続中の議論に重要な貢献をしている。2008年版認定基準は、次のような文章の中でその重要性を認識している。 「COAは教育方針のwebサイトを通じて適切な専門職団体からの方針を提示している。各学部がこれに沿ってプログラムを計画し、進展させ、評価することが基本である。」しかし、推薦事項を基準の中で明確に記述すると</p>

2. 認定基準を、強制的な口調(imperatives)に書き換えること。
3. 認定基準は、指示的(indicative)な記述でなく、規範的(prescriptive)な記述にすること(示唆的でなく、強制的な記述にすること)。

4. ALA は、ALA の認定を求める図書館情報学部、にコアカリキュラムを規定しようとは思わないが、コアとなる能力はカリキュラムの基盤となっていることは明確にすべきである。基準は、認定を受けた(図書館情報学部の)プログラムの卒業生の成果に焦点を当てること。

5. (図書館情報学部の)プログラムの専任教員の過半数は学歴、専門職の経験、及び(もしくは)研究や出版履歴において図書館学を基礎にしていることを認定基準に規定する。

6. ALA の認定を受けるプログラムでは専任教授の数が十分であり、教育、研究、その他のサービス活動を実践できる多様な専門性に富んでいることを認定基準に規定する。

7. 非常勤講師は専任教授の教育力を補足するか、バランスを取るために雇用されることを認定基準に規定する。

なると、多くの関連機関の意見を徴収する必要がある。

2. 3. に対して
認定基準が指示的(indicative)になっているのは、その性質上、特定の認定対象学部が基準を満たしているかどうかの評価、測定法、に関して様々な意見が存在する。これは他の多くの専門職領域の認定においても存在していることである。PTFLEの線に沿って改定すると、原則的にも実際的にも多くの示唆を含んでいるので、多くの関連機関の意見を徴収する必要がある。

4. 8. に対して
COA も COA によって作成されるコアカリキュラムがあるべきだとは考えていない。しかし、基準はコアカリキュラムの規定をせず、重要なカリキュラム領域を規定している。認定基準は、卒業生の成果測定の目的と必要性を数か所で言及している。2008年版認定基準では、さらにその点を強調している。

5. 6. に対して
COA は、認定された図書館情報学プログラムの卓越性を保証するために、適当な専門的経歴や研究業績を積んでいる教員スタッフの必要性を認める。専任と非常勤の割合に関しては、COA にとっても関心のある課題である。その割合に関する規範的なアプローチは、多くの関連団体の意見を徴収し、分析するに値するテーマである。

7. に対して
COA は、非常勤の重要性は専任とのバランスを取り、補足することにあることを認識しており、認定基準にその

<p>8. 認定のための評価プロセスは、すべての卒業生が認定基準に示されている成果を得ていることを示す十分な客観的な証拠が必要になることを明確にする。</p>	<p>ことを表現している。 (4 に対する回答を参照)</p>
---	--

4. 2 PTFLE 最終報告に対する他の関連団体の反応

COA からの要請により、いくつかの関連団体から PTFLE の最終報告への意見書が寄せられた。それらの中から、いくつかを以下に概観する。

まず ALISE の反応を見ると、ALISE は ALA の2008年版をほぼ適切なものと見なし、COA による認定プロセスの熱意を高く評価する、と述べている。認定基準は専任と非常勤の割合など教員の構成に関しては明確に記述していないが、ALISE は、図書館学教育が行われている大学の状況は様々であり、PTFLE の推薦のように特定の規範的な割合を示すのは妥当でない、と反論している。2008年版は、各学部における刷新を強調し、積極的な役割を担うことを奨励し、図書館情報学の将来的発展に関心を寄せていると「あとがき」に記しているが、ALISE はそれを重く受け止め、認定基準の改定論議の際にも重要なスタンスになるとしている⁽³⁵⁾。

次に ASIST の反応を見ると、ASIST も次の4つの理由を挙げて PTFLE の最終報告に反論している⁽³⁶⁾。

1. 情報専門職の必要性が人間活動のあらゆる領域で広がっている際に、最終報告の中に記述されている変更要求の事項は、図書館情報学(LIS)領域を著しく狭めるものである。現在、LISの30%近い卒業生が図書館職に就かない。変更要求にある特定能力への強調は、図書館と関係ない知識とスキルを教授する内容を阻害することになる。この狭隘志向は、ALA が長らく掲げてきた多様性と自由な発想に違反する。
2. 教員が LIS で教育を受けていること、という PTFLE の要求は、LIS プログラムの多様性や学際性を制限するものである。この制限は、高等教育界やビジネス界における学際的傾向に反するものである。情

報専門職と同様、図書館専門職もあらゆる領域で発生する広い範囲の情報ニーズに応えるべきである。学際的な科目の履修やプロジェクト経験、そして学際的な教員の指導を受ける学生は、専門職としての将来キャリアで成功するであろう。

3. PTFLE は「規範的」(prescriptive) な規定を要求しているが、強制的な基準よりも、各情報学学部プログラムが自分たちの目標を定め、進展の度合いを測定・評価する際には、規準に基づいた測定法 (criterion-based assessments) の利用を奨励する指針の方が優れた刷新をもたらしていることは、歴史が証明するところである。
4. ALA が認定する LIS プログラムには他の多くの組織や団体が利害関係を持っている。ASIST を含め、MLA、SLA、ACRL、ALISE は、自分たちの領域に将来就職する人たちが優れた教育を受けられることに強い関心を持っている。ALA はこれまで認定にリーダーシップを発揮してきたことは認めるけれども、PTFLE の最終報告の中の変更要求はそれら関係団体を考慮していない。

さらに iCaucus の反応はつぎのようなものである⁽³⁷⁾。

1. PTFLE の最終報告は、卒業生に共通の知識とスキルのセットを確実に持たせる手段として、認定と関連した形での規範的なコアカリキュラムへの変更を提唱している。ALA の認定プロセスを容易にしようとする意図は理解できるが、現在我々が直面しているような変化の激しい時代には、安定したコアカリキュラムは不可能である。比較的短期間の修士課程教育で現在の LIS 卒業生の持つ多様な専門職の目標を達成するためには、カリキュラムの柔軟性が要求される。また、コアカリキュラムは教育者、研究者、実務者の間で毎年点検・議論されなければ、時代遅れになるであろう。ALA が望んでいるような成果を達成する最も効果的な方法は、専門職のニーズの真の理解につながる実態調査を実施し、それらのニーズが我々のようなプログラムで如何に満たされているか、もしくは満たされていないか、を検証することである。
2. 「LIS プログラムで教えている専任の過半数は図書館学を基礎にし

ていること」、という PTFLE の要求に関しては、学生の質、就職状況、教員の研究業績を中心に考えるべきである。全体として、PTFLE の推薦するような認定基準は我々の学部や専門職には合致しない最後に SAA は、次のようなコメントを出している⁽³⁸⁾。

1. 我々は、「LIS プログラムで教えている専任の過半数は図書館学を基礎にしていること」、という PTFLE の要求に、大いに憂慮している。文書管理 (archival practice) が認定のための図書館職の一部として認められないならば、(図書館情報学部における) 統合された文書・図書館プログラムや小規模の図書館情報学部は図書館学専攻を提供できなくなる。これは極めて不幸なことである。何故ならば、多くの図書館が参考図書コレクションを有し、また稀覯本図書館は特殊な手書き文書を所蔵しており、それらの保護に図書館学の手法を応用するからである。いくつかの LIS 学部や iSchools では、新しく入ってくる大学院学生の 3 分の 1 から半分までが図書館学を専攻している。
2. 認定されたプログラムを持つ図書館情報学部は、自分の大学で何を教えるかに関して独立性を保つべきである。PTFLE の推薦事項を受け入れると、ALA にその独立性を渡すことになる。プログラムやアプローチにおける多様性が専門職を豊かにする。図書館学は図書館学と多くの能力を共有するが、PTFLE の長い変更事項は ALA による養成プログラムの支配をもたらし、SAA が 21 世紀のアーキビスト養成に必要だと認識する知識や科目の準備を難しくするであろう。

以上、ALISE、ASIST、iCaucus、SAA の PTFLE の推薦事項への反応を見てきたが、すべての団体 (協会) が PTFLE の考え方は受け入れがたいとしている。

5. 考察

本稿では、まず 2 で図書館情報学教育認定基準 2008 年版の策定に至るまでの経緯を明らかにし、そして 2008 年版を 1992 年版との比較を中心に概観した。次に 3 で、認定基準と同時に議論される「核となる能力」についての議論を

整理し、「ALAの核となる能力」の内容を概観した。そして、4で2008年版に対する反応をPTFLEの推薦事項を中心に、いくつかの関連団体(協会)の反応を概観した。

改定経過に関しては、1999年から2003年まで開催されたALA主催の専門職教育会議を出発点とした。この会議では150人の外部団体の代表も招聘され、図書館専門職と認定基準について議論され、認定基準の検討のために「外部認定団体」特別作業委員会、「核となる能力」を規定するために「核となる能力」作業委員会の二つが設置されたことに意義がある。

「外部認定団体」特別作業委員会はALISE、SLA、AALL、MLA、ARL等からの代表も加えて、2年間にわたる検討作業を行った。現認定制度の利点(強み)と欠点(限界)を同定した後、認定組織を連合体とすることと認定対象プログラムの範囲の拡大を提言した。しかし、この提言は実を結ばなかった。

次にALAの戦略では、質の高い大学院教育を目指すことが提示された。また、COAの戦略計画では、認定基準が図書館情報学領域のニーズを明確にし、プログラムがニーズを反映するものとなるよう、基準のレビューをしていくことが確認された。

「教育フォーラム」は、当初会長の個人的な委員会であったが、現在も続いており、特に2005年の会長ゴーマンの提出した「図書館学教育とALAの認定基準についての提言」は1992年版を激しく非難しており、後の「核となる能力」規定にも影響を及ぼしたといえる。

このような状況の中で、COAは2003年から2007年の5年をかけて1992年版を見直した後、2008年に認定基準を改定した。2008年版の特徴は、認定プログラムの目標が学生の学習成果に反映されるようなものであること、多様な社会のニーズに応えられるプログラムであることがあげられる。「核となる能力」の規定はまだ盛り込まれていないが、実務に通用する十分なカリキュラムが構成され、学習成果を明確にすることは、いうまでもなく卒業後のキャリアを想定してのことである。

次に「核となる能力」の規定についての議論を整理した。認定基準に「核となる能力」の規定がないことへの批判はさまざまな組織から言われていた。

またゴーマンは特にこの点について1992年版基準と図書館学教育を批判している⁽³⁹⁾。図書館学の対象は、人類が創り出したあらゆるフォーマット形式に表現された記録であり、目的はそれが利用されるための支援にあるとしている。認定プログラムはこの定義にしたがって、さまざまな専門的資質を持った十分な数の教員を擁し、図書館学を研究、教育すべきであると主張している。彼の提言には「図書館情報学」ということばはない。「図書館学」と「情報学」の区別をしている。そして図書館学の「核となる価値」は知的自由、個人と社会へのサービス、人類の記録に奉仕するもの、あらゆるアクセスの保障であるとしている。ゴーマンはまた、「図書館」の機能はインターネット時代においてこそ発揮できるとしている⁽⁴⁰⁾。それはあふれる情報を直接利用者が自分で自由に取り込める状況にあって、その中から適切に選択して信頼のおける情報だけを提供できるのは、提供することについてなんら利益を追求しない図書館だからできるのであるという。インターネットを通じて発信される情報はすでに利益追求の情報機関の手を経ているため、それらを吟味する必要が重要になっているという。

2008年版に対して、会長諮問機関である PTFLE の推薦事項に上記のような意向が強く働いているのは当然といえるだろう。推薦事項の主張は、2008年認定基準がもっと強制的な表現を使って、「核となる能力」を基準に盛り込むよう提言し、認定プログラムが目指す図書館情報専門職は、図書館実務に通じる能力をまず備えるべきという強い意志が伺える。専任教員に図書館学の基礎が必要とする提言も同じ趣旨である。COA は ALA の下部組織であるにも関わらず、ALA 会長の諮問機関である PTFLE が「対立」とも思えるような提言をしたことの背景について、Wallace は、次のように説明している⁽⁴¹⁾。認定された修士課程を提供する教育機関の名称に 'Library' ということばが外され、ischool (情報学部) に衣替える現状に危機感が ALA にある。名称が変更され、図書館学の教員が少なくなると、カリキュラムの中心が図書館学から離れることになる。認定基準には、「認定プログラムの目標は親機関の方針とも合致していること」とあるが、名称変更は親機関の方針であるから、という理由でプログラムの中身が変化することを押しとどめたい、という ALA の意向といえる。アメリカの図書館界で

「Librarian」という専門職は認定プログラムの修士課程を修了したものにだけ与えられるものであり、確固たる地位を築いてきた歴史を変えるわけにはいかない、という叫びに似たものと捉えられている

こうした PTFLE の推薦事項に対して、COA はすぐには受け入れられないとした。認定基準の変更は多くの時間と様々な分野の意見の徴収が不可欠であり、なにより、COA は親機関である ALA の影響を少なくしたいという意図があった。それは認定をまかされた組織の存立に関わることなのである。

PTFLE の最終報告に対しては、関連諸団体から寄せられた意見は COA を支持するものであった。ALISE、ASIST、iCaucus、SAA など図書館情報学教育に関係の深い組織からの反応は注目に値する。最も多い主張は、現在の図書館情報学のおかれている立場を反映しているといえる。すなわち、図書館情報学はもはや図書館という領域だけでなく、情報学やその他の分野と共に発展していく領域であること、認定プログラムの使命、目標、目的が、親機関の大学自体のそれと一致してこそ、図書館情報学部が継続してその地位を維持できるということ、また、図書館情報学部は認定を受けたといっても、独立性は保持されるべきであること、図書館現場では図書館専門職の必要性和一般図書館実務者が求められてきているということである。

図書館情報学教育論議は、専門職志向 (professional perspective) か、学問志向 (discipline perspective) か、に大きく2つに分けることができるとリンチ (Beverly p. Lynch) は論じている⁽⁴²⁾。この論稿で考察した専門職養成論議は、リンチの論ずる2分法で理解することができそうである。すなわち、1999年の「専門職教育会議」に起因する「核となる能力」作業委員会の2005年作成の「核となる能力声明」(草稿)から始まる、ゴーマンの主張、及び PTFLE の最終報告は、いわば実務者志向の専門職養成(図書館情報学教育)論議であった、そして、それらの諸要求に対する COA の反応、PTFLE の最終報告への関連諸団体の反応は、学問志向の図書館情報学教育論議であった、と理解することができる。

リンチは、上記のような議論を歓迎し、次のように述べている⁽⁴³⁾。

研究大学に位置づけられた教育プログラムから得られる知識によって、

図書館職の実践は豊かになってきた。職場から発生する諸課題に焦点を当てる教育者や研究者によって、調査研究は豊かになってきた。専門職教育の目的は、将来の実践者を教育・訓練することであり、実践に必須な知識を進展させることである。図書館情報学は、多くの挑戦に合いながらも、それらの目的を遂行してきている。図書館学教育に対する変更要求はすべて、教育プログラムの質と職場の質の問題に起因している。教育プログラムの変更やカリキュラムに関する議論は今後もつづき、そして専門職の論議と発展を豊かにするであろう。

6. 結び

この論稿から、21世紀に入ってからの図書館情報学教育認定をめぐる図書館情報学教育論議は、アメリカの図書館情報学界に亀裂を生じさせかねない危険性もある、と第3者には憶測され兼ねない。リンチはそのような状況を健全な発展過程だと指摘している。スウィガー (K. Swigger) も、専門職の教育者と実践者の緊張感は健全であるとし、そのような緊張感がなくなることなく、何を、誰に、どういう形で教えるか、という有効な議論の基となると述べている⁽⁴⁴⁾。それらの論議が将来どのように展開するか、また、図書館情報学教育や認定基準が今後どう変化していくか見守っていく必要がある。

翻って、日本では、2012年に向けて大学における司書課程のカリキュラム改定の準備が始まっている。カリキュラムに対する米国のような認定機関はないが、文部科学省が省令としてガイドラインを作成している。今回の改定においては、まず「これからの図書館の在り方検討協力者会議」によって改定の草案が作成され、それをもとにパブリックコメントが集められて、最終案が出来上がった経緯があるが、日本図書館協会を始め、医学図書館協会などの専門図書館の組織、日本図書館情報学会からも、もっと活発な意見交換がなされ、更新過程がより明確なものとなって、図書館情報学教育はいかなる能力、資質を持った図書館情報専門職を養成していくかを考えていくことが今後の課題である。

注

- (1) Council on Higher Education Accreditation. *Informing the Public About Accreditation*. 2006. http://www.chea.org/public_info/index.asp ; The Higher Learning Commission (A Commission of Associations of North Central Schools and Colleges). *Understanding Accreditation*. 2010. <http://www.ncahlc.org/information-for-the-public/public-information.html> ; F. William Summers, *Accreditation, and the American Library Association*. 1999. <http://www.ala.org/ala/educationcareers/education/1stcongressonpro/1stcongressf.cfm/#> (参照 2010-4-10)
- (2) 大城善盛「アメリカの図書館情報学教育における認定」『図書館界』Vol.50, No. 4, 1998. 11, p.168-77 ; 溝上智恵子「アメリカの図書館情報学教育と認証評価」『図書館情報メディア研究』Vol. 2, No. 2. 2004, p.33-44. www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M79/M793959/4.pdf (参照 2010-4-10)
- (3) Thomas W. Leonhardt, “Future Directions of ALA Accreditation Presented at the American Library Association Forum on Education,” *Prism*. 15:1 2007. Spring. http://www.ala.org/ala/aboutala/offices/accreditation/prp/prism/prismarchive/prism_sp07.pdf (参照 2010-4-10)
- (4) American Library Association, *Final Report of the Steering Committee on the Congress on Professional Education*. ; Ken Haycock, “The Congress on Professional Education in North America.” 66th IFLA Council and General Conference, Jerusalem, 2000. <http://archive.ifla.org/IV/ifla66/papers/146-156e.htm>
(参照 2010-4-20)
- (5) それら組織や団体の詳細に関しては以下を参照。国立国会図書館編『米国の図書館事情』日本図書館協会, 2007, 365p.
- (6) 前掲(4)
- (7) 外部レビュー・パネルとは、ALA の認定プロセスにおいて COA によつ

て任命される外部者の委員会のことで、認定対象になっている図書館情報学部を訪問し、実地調査を行う。

Accreditation of Programs in Library and Information Studies (Draft). 2001. <http://web1.ala.org/ala/educationcareers/education/1stcongressonpro/1stcongressexternalaccreditationtf.cfm> (参照 2010-4-20)

- (8) American Library Association Ad Hoc Task Force on External Accreditation, *A Proposal for External Accreditation of Programs in Library and Information Studies (Draft)*. 2001.
- (9) Kniffel, Leonard, “ALA Executive Board, Midwinter 2002: Move to Establish Independent Accrediting Agency Loses Momentum,” <http://www.ala.org/ala/online/eboardmtgs/alamidwintermeeting2002.cfm>
- (10) ALA, *ALAHead 2010, Starategic Plan*. 2005. <http://www.ala.org/ala/aboutala/missionhistory/plan/2010/index.cfm> (参照 2010-4-10)
- (11) American Library Association Committee on Accreditation, *Strategic Plan 2005-2010*. 2006. www.ala.org/ala/aboutala/offices/accreditation/coa/COAstrategicplan2005.pdf (参照 2010-4-10)
- (12) American Library Association President’s Task Force on Library Education, *Final Report*. 2009. 所収 : *ALA Executive Board 2009 ALA Midwinter Meeting* http://www.pla.org/ala/aboutala/governance/officers/eb_documents/2008_2009ebdocuments/ebd12_30.pdf (参照 2010-4-10)
- (13) Library Education; Archives for: December 2006. <http://blogs.ala.org/libraryeducation.php?m=200612> 等のブログ (参照 2010-4-10)
- (14) John Budd, *The Intentional Curriculum: An Exploration of Academic and Intellectual Politics*. http://mg.csufresno.edu/papers/Core_Curriculum.pdf (参照 2010-4-10)
- (15) Michael Gorman, *A Paper on Education for Librarianship and ALA’s Standards for Accreditation of Master’s Programs in Library and Information Studies, 1992*. 2005. <http://mg.csufresno.edu/>

PAPERS/Accreditation_standards.pdf (参照 2010-4-10)

- (16) American Library Association, *Standards for Accreditation of Master's Programs in Library & Information Studies*. 2008, p.3. http://www.ala.org/ala/educationcareers/education/accreditedprograms/standards/standards_2008.pdf (参照 2010-4-10)
- (17) 前掲(16), p.3-4.
- (18) 前掲(16), p.4.
- (19) 前掲(16), p.13.
- (20) 前掲(16), p.14.
- (21) American Library Association, *Final Report of the Steering Committee on the Congress on Professional Education*.
- (22) たとえば、SLA には ‘Competencies for information Professionals of the 21st Century’ が2003年に発表されている。
<http://www.sla.org/content/learn/members/competencies/index.cfm>
(参照 2010-6-21)
- (23) American Library Association. “Draft Statement of Core Competencies July 2005” <http://www.ala.org/ala/aboutala/offices/accreditation/prp/DraftCoreCompetencie.pdf>. (参照 2010-4-10)
- (24) Renée D. McKinney, *Draft Proposed ALA Core Competencies Compared to ALA-Accredited, Candidate, and. Precandidate Program Curricula: A Preliminary Analysis*. 2006. www.ala.org/ala/aboutala/offices/accreditation/prp/Core_Competencies_Co.pdf
(参照 2010-4-10)
- (25) 前掲(24)
- (26) ALA, *Core Competencies*. <http://www.ala.org/ala/educationcareers/careers/corecomp/corecompetences/index.cfm> ; ALA Council, *Chapter Councilor's Report*, Denver, Co., 2009. http://www.njla.org/statements/councilor_report.pdf ; ALA Executive Board, *2009 ALA Midwinter Meeting; Topic: Final Report, Library Education Task Force (Special)*. http://ala.org/ala/aboutala/governance/officers/ebdocuments/2008_

- 2009ebdocuments/ebd12_30.pdf ; ALA, *ALA's Core Competences of Librarianship*. 2009. <http://www.ala.org/ala/educationcareers/careers/corecomp/corecompetences/finalcorecompstat09.pdf> (参照 2010-4-10)
- (27) ALA, *ALA's Core Competences of Librarianship*. 2009. <http://www.ala.org/ala/educationcareers/careers/corecomp/corecompetences/finalcorecompstat09.pdf> (参照 2010-4-10)
- (28) Berry, John “After more than a decade of debate, ALA Approves Core Competencies” *Library Journal* 01/28/2009 http://www.library_journal.com/article/CA6632572.html (参照 2010-6-13)
- (29) American Library Association President's Task Force on Library Education, *Final Report*. 2009. 所収 : *ALA Executive Board 2009 ALA Midwinter Meeting* http://www.pla.org/ala/aboutala/governance/officers/eb_documents/2008_2009ebdocuments/ebd12_30.pdf (参照 2010-6-03)
- (30) Committee on Accreditation, Committee on Accreditation (COA) *Response to the Final Report of the Presidential Task Force on Library Education*. 2009. http://www.ala.org/ala/aboutala/governance/officers/eb_documents/2008_2009ebdocuments/ebd12_66coa_response.pdf (参照 2010-4-10)
- (31) 前掲(30)
- (32) 前掲(30)
- (33) 前掲(30)
- (34) 前掲(30)
- (35) Association for Library and Information Science Education, *Response to ALA Task Force Recommendations*. 2009. <http://www.alise.org/mc/page.do?sitePageId=91941> (参照 2010-4-10)
- (36) American Society for Information Science and Technology, [Comment]. 2009. http://www.asis.org/news/ALA_COA_response.pdf (参照 2010-4-10)
- (37) icaucus は25の国際的 iSchools で構成。15の iSchools は ALA の認定

校である。

Norman Oder, “Information-Oriented Organizations Says Rules Are Too Prescriptive,” *Library Journal*, 5/28/2009. <http://www.libraryjournal.com/article/CA6661278.html> ; ALA Office for Accreditation, *3. Comments on the Task Force recommendations sent directly to the Office for Accreditation*. http://www.oa.ala.org/accreditation/?page_id=61 (参照 2010-6-13)

(38) ALA Office for Accreditation, *Comments on the Task Force recommendations sent directly to the Office for Accreditation*. http://www.oa.ala.org/accreditation/?page_id=61 (参照 2010-4-10)

(39) 前掲(15)

(40) Gorman, Michael, “Whither library education?” *New Library World*. Vol.105, No.1204/1205. 2004, p.376-378.

(41) Wallece, Danny p., “The iSchools, education for Librarianship, and the Voice of Doom and Gloom.” *The Journal of Academic Librarianshi*. Vol.35. No. 5, 2009. p.405-409.

(42) Beverly p. Lynch, “Library Education: Its past, Its present, Its future.” *Library Trends*. 2008. 5. <http://www.thefreelibrary.com/Library+education:+its+past,+its+present,+its+future.-a0184699140> (参照 2010-6-03)

(43) 前掲(42)

(44) Keith Swigger, *Education for an Ancient Profession in the Twenty-first Century*. 1999. <http://www.ala.org/ala/educationcareers/education/1stcongressonpro/1stcongresseducationancient.cfm/#> (参照 2010-4-10)

(なかじま さちこ。おおしろ ぜんせい。
かなな けんじ。やまもと たかこ。

2010年6月30日受理)